

帝王貝細工の「花びら」の不思議

帝王貝細工という草花には、いかめしくて立派な名前がついている。あまり植える人がいないらしく、種子のカタログを調べたら、載っていないものもある。私が入手した種は、どこかのサービスで配ったものである。庭が空いているので、育てて花を眺めていたら、おもしろいことを発見した。

花が雨にあうと、「花びら」を閉じていっせいに丸い坊主になってしまう（写真左）。晴天になって太陽が差すと、いっせいに「花びら」が開く（写真右）。最初はそんなものかと思っていたが、しだいに、なぜそんなに几帳面なのだろうと疑った。その疑問が深化したきっかけは、花が枯れて「ドライフラワー」になっても、「生花」といっしょに開閉を繰り返すからである。

（写真左参照。右下の黒ずんだ赤色の坊主がそれ。すでに種子が飛んで中身がない。しかも茎が黒く枯れている。）

私が想像した「意味」はこうなる。「花びら」が開いたとき、もし種子が熟していれば、ふわふわした綿毛が付いた種は、風に乗って遠くへ飛んでいく。それが太陽の光できらきらと光る。雨で「花びら」が濡れると、種を守るためしっかりと閉じる。ただ、種がなくなれば開花を止めるほど高級な仕組みでないので、枯れてしまっても「花びら」の開閉を繰り返す。

この仕組みを支えているのは、明暗に感ずる光センサーなどではあるまい。より簡単に、「花びら」の表と裏が違う材質（たぶんポリマー）でできているからだろう。たとえば、開いたとき人に見える側が水に濡れ難いポリマー、その裏が雨に濡れて伸びるポリマーとすれば、こういう面白い現象を説明できるのではないか。

理屈はさておいて、帝王貝細工の花たちは、老いも若きもいっせいに開き、いっせいに閉じる。ドライフラワーにして一部に霧を吹きつけると、楽しい細工ができそう。まだ試したことはないが。



